

人生の転換期における心理

筑波大学心理学系

落 合 幸 子

問 題

長い一生は決して平坦ではあるまい。意気揚々と前向きに前進する時期もあれば、停滞して不安とあせりの中で鬱々とすすむ時期もある。この停滞している時期はどのような心理的特質を示すのであろうか。学習曲線を描くとプラトー、すなわち高原現象とよばれるものがあらわれる。学習が進行し学習曲線が上昇した後、ある時期がくると学習曲線が平坦を描く。これがプラトーとよばれるもので学習が少しも進歩したようにみえない時期である。その後さらに練習をくり返すと再び学習曲線は上昇する。このプラトーの時期は、それまで学習した技能を安定させ、その後の発展の基礎をつくる時期であるといわれる。練習者は技能の進歩がみられないので、練習が空転してあせる。このあせりの感情の中でプラトーを脱するために今までの練習方法の再検討を行ったり、新しい技術の獲得を試みる。

人生の中で停滞している時期は、プラトーに似ている。本論文ではこのような人生のプラトーを転換期と名づけた。

プラトーの時と同様、人生の転換期はまたあせりの時期といえる。あせりという感情は、一定の制限時間内に達成しなければならぬ課題がある時に生じる感情である。人生の中での制限時間とは何か。それは年齢であり、その内で達成させねばならぬ課題とは、結婚、就職、育児、社会的成功、社会的自立、後継者の育成、子どもの独立など数多くあるであろう。そこで、転換期には自分の年齢に対する自覚が強まると考えられる。従って年齢に対する意識を明らかにするために3つの項目について調べた。

①人生での大きな出来事と考えられる事柄を実行するための年齢的限界をたずねる。ここでは、離婚と、人生のやり直しの年齢的限界をたずねた。②中年、老年とは何歳ぐらいをさすのか、人生の終焉、死がいつなら納得するのかをたずねた。中年、老年に入ってしまう、寿命があと何年しか残されていないという意識はあせりを引き起こすと思われる。③年齢を強く意識した時期と理由をたずねる。

次に、転換期の質を明らかにするために、これまでの人生でどのような転換期があったかを回想式にたずねた。これによって年齢と関係づけながら転換期の内容的

変化を把握することが可能になると思われる。

目 的

人生の転換期がいつごろ、どのような内容でおとずれるかを次の2点から明らかにする。

1. 年齢に対する意識

①離婚、人生のやり直しをする際の年齢的限界、②中年、老年、寿命についての意識、③年齢を強く意識した時期とその理由、を調べた。

2. 転換期の内容の年齢的变化

転換期の時期と内容を回想的にたずねた。

方 法

1. 被験者 20歳から80歳までの男女。女性の20歳台の者4名、30歳台の者1名の他は、都内女子私立短大生の両親である。調査対象人数は表1に示す通りである。

表1 調査対象人数

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
男	0名	3名	43名	45名	1名	1名
女	4名	4名	83名	19名	2名	2名

2. 調査内容

17歳から70歳までの年齢を記した用紙を配布し、次の項目について記述させた。

(1) 年齢に対する意識に関する調査

① 人生の重大事件の年齢的限界

イ、離婚するとしたら何歳が限度か。

ロ、人生をやり直せるとしたら何歳が限度か。

② 年代についてのとらえ方

ハ、中年とは何歳ぐらいをさすか。

ニ、老年とは何歳ぐらいをさすか。

ホ、何歳ぐらいなら死んでもよいと思うか。

以上のイ、からホ、についてはそれぞれ該当する年齢に×印をつけさせた。

③ 年齢に対する関心が強まる時期

イ、年齢を強く意識した時期に○印をつけさせる。

ロ、○印をつけた年齢を意識した理由を書いてもらう。

(2) 転換期についての調査

- ① 重要な転換期だと思われた時期を } でかこむ。
 ② 転換期に何を感じ、何を思ったか、なぜそう思ったか、内容およびその契機について記述してもらった。

結 果

1. 年齢に対する意識に関する結果

(1) 年齢的限界についての調査結果

離婚年齢の限界(表2)は、女性では30歳とする者がもっとも多く36%を占める。次が35歳で20%の者がいる。累積すると35歳までとする者が87%に達する。男性でも、30歳、35歳を限界とする者が多いが、女性とは反対に35歳とする者が30%、30歳とする者が22%となっている。そして男性では40歳と考えている者も30歳と考える者と同数の22%いる。

半数を越える者が離婚限界とするのは、女性30歳、男性35歳となっている。又90%の者が離婚限界と考える年齢は女性では35,6歳、男性では40歳である。男性と女性では離婚限界が異なり、女性のほうが4,5歳早いといえよう。

人生のやり直し限界(表3)として多くの者が考えている年齢は、女性では、30歳26%、35歳20%、40歳19%と多くなっている。離婚限界と異なり40歳をやり直し限界と考えている者がいる。男性も同じく30歳で18%、35歳で21%、40歳で25%がやり直し限界と考えている。しかし、女性では30歳がもっとも多く、35歳、40歳の順になっているのに対して、男性は40歳、35歳、30歳の順であり、男性とは逆である。やり直し限界とする年齢も男性より女性の方が早い。

離婚年齢の限界と人生のやり直し限界とを比べると、人生のやり直し限界のほうが年齢が高い。半数を越える者が含まれる年齢は、女性35歳(離婚年齢は30歳)、男性35歳(離婚年齢も35歳であるが、その場合は35歳までに70%の者が入り、やり直し限界の場合には50%の者しか入らない)である。また90%の者が含まれるのは、女性42歳(同36歳)、男性45歳(同40歳)である。

その他の面でも性差がある。男性では17,8歳という10代の時期をやり直し限界とする者が3名いるという点である。女性では23歳がもっとも若い。男性3人とも余白の部分に「やり直せるのなら17,8歳からやってみたい」と述べている。女性の場合、結婚や子どもの出生という重要かつ具体的な出来事をやり直しの理由とする。それに対して男性は青年期のほんの初期いわば人生のはじめからの出発を希望する。これは男性のロマンティストの一面をあらわすのかもしれない。

(2) 中年, 老年, 寿命についての意識

中年を何歳からと考えるかに関する結果(表4)をみ

表2 離婚の年齢限界

年 齢	女 性		男 性	
	人	%	人	%
	N=86		N=53	
23	3 (3.8)	3 (3)		
24			1 (2)	1 (2)
25	1 (1)	4 (5)		
26	2 (2)	6 (7)		
27	2 (2)	8 (9)		
28	4 (5)	12 (14)	1 (2)	2 (4)
29	6 (7)	18 (21)	2 (4)	4 (8)
30	31 (36)	49 (57)	12 (22)	16 (30)
31	2 (2)	51 (59)	1 (2)	17 (32)
32	3 (3.8)	54 (63)	1 (2)	18 (34)
33	1 (1)	55 (64)	1 (2)	19 (36)
34	3 (3.8)	58 (67)	2 (4)	21 (40)
35	17 (20)	75 (87)	16 (30)	37 (70)
36	2 (2)	77 (90)		
37	0 (0)			
38	1 (1)	78 (91)	1 (2)	38 (72)
39			1 (2)	39 (74)
40	3 (3.8)	81 (95)	12 (22)	51 (96)
48	1 (1)	82 (95)		
49				
50	3 (3.8)	85 (99)	1 (2)	52 (98)
55	1 (1)	86 (100)	1 (2)	53 (100)

表の左欄は各年齢を選んだ者の人数と全体に対する割合である。右欄は該当年齢までを累積した者の人数と全体に対する割合を示している。表2から表7まで同様である。

ると、男女とも30歳以前を中年と考えるものはいない。

30歳を中年と考える者は女性2%、男性1%とまだ少ない。多くの者が中年と考えるのは40歳で、女性の36%、男性の34%が40歳と答えている。それまでの年齢に入る者を累積すると40歳までに女性の63%、男性の51%が入る。次に多いのが45歳で男女ともに急増加している。女性の16%、男性の17%が45歳と答え、累積すると女性の89%、男性の82%が45歳までに含まれる。女性の方が男性よりも若年で中年と考える傾向があることはこれまでの結果と同様である。男女とも35歳を中年と考える者も多いが、35歳以前の年齢に含まれる者を合計すると女性は20%、男性は12%である。

表3 人生のやり直しの年齢限界

年齢	女性 N=81		男性 N=66	
	人	%	人	%
17			1 (1.5)	1 (1.5)
18			2 (3)	3 (5)
23	1 (1)	1 (1)		
24				
25	2 (3)	3 (4)		
26	1 (1)	4 (5)		
27	1 (1)	5 (6)		
28	2 (3)	8 (9)	1 (1.5)	4 (6)
29	1 (1)	7 (10)		
30	21 (26)	29 (36)	12 (18)	16 (24)
31				
32	1 (1)	30 (37)		18 (27)
33	1 (1)	31 (38)	2 (3)	19 (29)
34	1 (1)	32 (40)	1 (1.5)	33 (50)
35	19 (23)	51 (63)	14 (21)	
36				
37	1 (1)	52 (64)	1 (1.5)	24 (52)
38	2 (3)	54 (67)	1 (1.5)	25 (53)
39	2 (3)	56 (69)	1 (1.5)	26 (55)
40	15 (19)	71 (88)	16 (24.5)	52 (79)
41	1 (1)	72 (89)	1 (1.5)	53 (80)
42	1 (1)	73 (90)		
43	1 (1)	74 (91)		
44				
45	2 (3)	8 (12)	8 (12)	61 (92)
50	4 (5)	80 (99)	5 (8)	66 (100)
64	1 (1)	81 (100)		
66				

老年は何歳からか(表5)については、男女ともに50歳前を老年と考える者はいない。女性では50歳、男性では52歳ではじめて老年とする者があらわれる。男女ともに60歳を老年と考える者が多く、女性で55%、男性で60%の者が60歳と答えている。次に多いのが65歳で女性の18%、男性の28%がここに入る。累積すると男女ともに95%の者が65歳までの間に入る。男女を比較すると、女性の方が若年で老年と考える傾向がある。女性では55歳を老年と考える者が8%おり、59歳までを累積すると女性の15%、男性の6%が50代を老年と考えている。

死んでもよいと思う年齢(表6)は、男性と女性では大きな差はない。しかし女性では60歳で死んでもよいと

表4 中年は何歳からか

年齢	女性 N=92		男性 N=68	
	人	%	人	%
30	2 (2)	2 (2)	1 (1)	1 (1)
31				
32	1 (1)	3 (3)		
33	2 (2)	5 (5)		
34				
35	13 (14)	18 (20)	7 (10)	8 (12)
36	2 (2)	20 (22)		
37			1 (1)	9 (13)
38	4 (4)	24 (26)		
39	1 (1)	25 (27)	3 (5)	12 (18)
40	33 (36)	58 (63)	23 (34)	35 (51)
41	5 (5)	63 (68)	7 (10)	42 (62)
42	2 (2)	65 (71)	2 (3)	44 (65)
43	2 (2)	67 (73)	1 (1)	45 (66)
44				
45	15 (16)	82 (89)	11 (17)	56 (82)
46	1 (1)	83 (90)	2 (3)	58 (85)
47	2 (2)	85 (92)	2 (3)	60 (88)
48			2 (3)	62 (91)
49				
50	4 (4)	89 (97)	6 (9)	68 (100)
55	2 (2)	91 (99)		
59	1 (1)	92 (100)		

いう人が8%いる。男性では死んでもよいと考える年齢でもっとも若いのは65歳で23%いる。女性も20.5%の者が65歳と答えている。65歳という答が男女ともにもっとも多い。他に70歳が女性20.5%、男性21%、75歳が女性17%、男性18%、80歳が女性19%、男性17%となっている。75歳までとする者は、平均寿命だからまあ納得という者が多い。それ以下の場合はあまり老いをさらしたくないとか、子どもたちに迷惑をかけるという理由をあげている。80歳までを含めると女性の96%、男性の92%が入るが、80歳まで生きるとまあ生きたほうだろうという心残りのなさが感じられる。

(3) 年齢を感じた時期に関する調査結果

年齢を強く意識した時期としてチェックした者の人数を図示したものが図1である。

これをみると、年齢に対する関心の集まるのは、女性は、20歳、24歳、25歳、30歳、33歳、35歳、40歳、45歳、47歳、50歳である。男性は20歳、30歳、35歳、42歳、45歳、47歳である。男女ともに共通しているのは、5と0

表5 老年は何歳からか

年齢	女性 N=97		男性 N=73	
	人	%	人	%
50	3 (3)	3 (3)		
51				
52			1 (1)	1 (1)
53			1 (1)	2 (3)
54				
55	8 (8)	11 (11)	1 (1)	3 (4)
56	2 (2)	31 (14)		
57			1 (1)	4 (6)
58				
59	1 (1)	14 (15)		
60	53 (55)	67 (69)	43 (60)	47 (64)
61	2 (2)	69 (72)	1 (1)	48 (67)
62	3 (3)	72 (75)		
63	2 (2)	74 (77)	1 (1)	49 (68)
64				
65	17 (18)	91 (18)	20 (28)	69 (95)
70	4 (4)	95 (98)	3 (4)	72 (99)
75	1 (1)	96 (99)		
80	1 (1)	97 (100)	1 (1)	73 (100)

表6 何歳まで生きられればよいか

年齢	女性 N=83		男性 N=65	
	人	%	人	%
60	7 (8)	7 (9)		
65	17 (20.5)	24 (29)	15 (29)	15 (23)
66				
67				
68	1 (1)	25 (30)		
69				
70	17 (20.5)	42 (51)	14 (21)	29 (45)
71				
72	2 (3)	44 (53)	2 (3)	31 (48)
73				
74				
75	14 (17)	58 (71)	12 (18)	43 (67)
76			1 (2)	45 (70)
77	2 (3)	60 (73)		
78	3 (4)	63 (77)	3 (5)	48 (75)
79				
80	16 (19)	79 (96)	11 (17)	59 (92)
81				
82				
83			1 (2)	60 (94)
84				
85	1 (1)	80 (97)	1 (2)	61 (95)
86				
87				
88	1 (1)	81 (98)		
89				
90以上	1 (1)	82 (99)	4 (7)	65 (100)

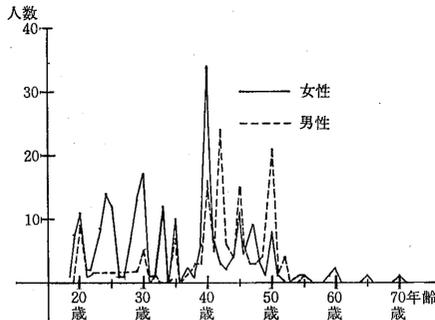


図1 各年齢を意識した者の数

のつく年齢である。

その他に目立つものとしては、女性の33歳と男性の42歳がある。ともにヤク年といわれる年齢である。それと女性の24歳がある。世間的にいう結婚適齢期である。

次に年齢を意識した理由として挙げられた反応を年齢別にみていく。全反応をあげる紙面がないので代表的な反応のみをあげた。表7に示す反応をみると、どの年代も似た経過をとる。5と0のつく年齢が年齢を意識する

度合が高いことは前にもみてきたが、5と0のつく年齢をめぐる1つのパターンがあるようだ。

5のつく年齢には四捨五入意識がある。24歳と25歳、34歳と35歳、44歳と45歳は年齢に対する受けとめ方が微妙に異なる。例えば、24歳は花の結婚適齢期だが25歳になるともう行き遅れという意識がでる。5のつく年齢になると次の年代、つまり35歳なら40歳が身近なものとして感じられ始めるのである。表7をみても5のつく年齢では必ず次の年代を意識している反応がでている。この5のつく年齢がすぎるとあたかも坂道をころげるような感じで次の年代に進んでいき、それまでの数年よりもっと早く年がすぎていくような感じがある。そして次の年代になる自分を受容できず、心の中で抵抗を試みるようになる。この抵抗がせせり、さみしさ、わびしさ、恐怖

表7 年齢を意識した理由

年齢	女性	年齢	男性
20 25	<ul style="list-style-type: none"> • 成人だ一人前として自覚しなければ • 結婚適齢期がすぎてしまう 	20	<ul style="list-style-type: none"> • 成人だ、社会人として認められる年だ
29	<ul style="list-style-type: none"> • あと一年で20代と別れると思うと淋しい・もうすぐ30だ・若いままではいられないとあせる 	27 29	<ul style="list-style-type: none"> • そろそろ結婚してもいい年だ • ついに黄金の20代も終りだ • 20代の何と早いことか、30代も早く過ぎるのだからうか
30	<ul style="list-style-type: none"> • もう歳をとりたくない・急に年齢を感じる・いよいよ30・とうとう30 • 人生の半分を過ぎてしまった・一段と大人の世界に入った 	30	<ul style="list-style-type: none"> • もう30歳か • 年代の替り目・人間として成熟期に入る
30-33 35	<ul style="list-style-type: none"> • 30歳を過ぎたという実感がある・ヤク年だ • 40歳に近づく・体力の衰えを感じる・中年を感じてあせる・人生のくんだり坂のように思える・寂しい・若い人がうらやましい・視力がおちた 	32 35	<ul style="list-style-type: none"> • 中年、小老という言葉に変な意識をはじめめる • 40歳が近い・中年を感じる • 体力の衰えを感じる・人生のなかば白毛、遠視はじまる
37-38	<ul style="list-style-type: none"> • 体力のくんだり目を感じる・頭の回転にぶった • 中年という言葉が自分にぴったりの感じ • 自分も年だからと口にするようになった 	37-38	<ul style="list-style-type: none"> • 中年期を感じる・体力おちこみ若い頃がなつかしい • 40歳を意識 • 40歳になると身心ともにおいこむのかと思う
39	<ul style="list-style-type: none"> • あと1年で40だと思うと、わびしく、淋しく、あせる 	39	<ul style="list-style-type: none"> • 来年は40だ・40になったら何をすべきかを考えた • やはり30代も短かった
40	<ul style="list-style-type: none"> • 年をとったなあ・もう40だ・あと10年で50になる長生きしたなあ • 白髪、老眼、体力的に無理がきかない。人生の半分がすぎた 	40	<ul style="list-style-type: none"> • もう年だなあ・人生50年本当の人生は40代で終る気がする • 体力がおとろえ無理がきかない
41-44	<ul style="list-style-type: none"> • 更年期の変調を感じる • 40歳がすぎた・体型かわり始め中年を感じ若くない気持ちができる • 体力回復のために運動をはじめ心がはれる 	41-44	<ul style="list-style-type: none"> • 体力がぐっと衰える・人生の坂をくだけはじめた • 厄年だ。体力的限界 • スポーツをしはじめ • 成人病で・定期診断はじめる
45	<ul style="list-style-type: none"> • もう少しで50歳だ • 自分では若いつもりだが体力なく年をとったと思う 	45	<ul style="list-style-type: none"> • もう少しで50歳だと思うと淋しい • 人生のくんだり坂にきたのかと淋しさが襲う・人生の1/3か1/2を越した • 体力・気力の衰えが急速に進行するのではという不安、おそろしさを感じる
46-48	<ul style="list-style-type: none"> • 更年期なのかと思う • 年老りの気持も若い人の気持もわかる • 自分の老い先より子どもの将来楽しみ 	46-48	<ul style="list-style-type: none"> • 人生50年にせまった • 体力的限界つくづく感じる・現状維持をめざす • 48歳の抵抗考える
49	<ul style="list-style-type: none"> • あと1年で50歳 	49	<ul style="list-style-type: none"> • あと1年で大台 • 人生のくんだり坂をおりる恐怖 • 若い若いと思っていたがもう50になるのか
50	<ul style="list-style-type: none"> • 50年生きたんだ・孫ができおばあちゃんになり年寄気分になる • 50歳になった淋しさ 	50	<ul style="list-style-type: none"> • 人生50年、49歳までは若年意識があったが幾分若さがうすらいだ • これからが人生の総仕上げ・定年近くなった・年をきかれるのがいや
51-58	<ul style="list-style-type: none"> • もう若くない・子どもが手をはなれる時のことがしきりに思われる・体にガタがきて医者と縁がきれなくなった 	51-55	<ul style="list-style-type: none"> • 孤独を感じる・人生やっぱり妻と2人 • もうすぐ偉年

を感じさせる原因となる。こうした感情は9のつく年齢でピークに達する。

次の年代に入るとこうしたあせりは消え新しい年齢に適応しはじめ、その年齢のよさについての記述がみられる。その後数年、5のつく年齢に達するまでは比較的安

定した時期をすぎす。ただし、ヤク年だけは別で女性の33歳、男性の42歳は、体力の衰えも加わって、自分の心身について関心が増大する。

次に年代の変り目に対する感じ方についてみてみると、各年代の感じ方が異なっている。どの年代でも変り

目は、若い時代から急に年をとった年代に入るような気がして嫌だという点は共通している。しかし、30歳は、まだ社会に巣立ってから数年しかたっておらず、まだ十分若く人生をこれからだ、本当の人生、成熟した人生がこれから始まるという積極的な意味あいがある。ところが40歳は、意欲をもってとり組んだはずの10年が意外に早く経ってしまい35歳をすぎてがっくりと体力もおとろえてしまった。30歳の時のように未来も信じてことができず、自分の限界も見えてきた気がしている。しかしまだ人生をあきらめられず、力をふりしぼって出発しようとしている。そして50歳になると、前進していく人生は終り、総仕上げの時期に入る。攻撃の人生から守りの人生へと移行していくのである。

2. 転換期の内容の年齢の変化に関する結果

転換期として記述された内容を検討した結果、次の5つの内容に分類された。(1)生理的転換期、(2)生き方を再考する精神的転換期、(3)社会的貢献意識、(4)結婚をめぐる人生の転換期、(5)子の親となることと転換期、(6)人の死と転換期、である。(1)の生理的転換期については、年齢を意識した理由の項に加えて分析した。従って(2)以下の内容についてそれぞれ分析する。

(1) 生き方を再考する精神的転換期 (表8)

20代についてみると、女性が最初にぶつかる転換期は24、5歳にある。世間的には結婚適齢期とよばれる時期である。この時期自分の生活のむなしさを感じる女性は多い。結婚かその他の道(多くの場合は仕事)かの選択をせまられる時期である。

次が30歳を直前にひかえた28、9歳の時期である。一般的には子どもを生み終えているか末子の誕生の時期である。0、1、2歳のもっとも手のかかる子どもをもつ育児期である。ふと急がしさの間に気づくと30歳に近い。30歳とは、ちょっと前までずい分年だと感じていた年齢である。その年齢に自分なろうとしている。ここで30までに今まで忘れていた自分自身をとりもどしたいという感情がでてくる。そこには、女性の第1の価値評価基準であった外面的な若さが失われつつあることに対する恐れが関係している。人からおばさんと呼ばれ、自分の認知と他人による認知のずれに気づきショックを受けるのもこの時期である。

男性の20代もある種の不安定さがある。就職していない者は、就職へのあせりが、就職している者はついた職についての不安がある。職業が適職なのか、妻子を養うだけの稼ぎが可能かといった不安である。

30歳に入ると、女性はより自分自身の生き方を取りもどしたいという気持ちが強くなる。家庭にどっぷりつきこんでいる自分を発見し、そこから抜けだそうと必死である。35歳ぐらいになると、末子も小学校入学を果して

いるので、これくらいから実際にパート、PTA、趣味の教室、資格とり、ママさんバレーなど始める者が多くなる。その後30代後半は、女性の一生にとって大きな危機ではないかと予想される。30歳を直前にした時にはまだ人生はこれからであるという前向きの面があった。しかし38、9歳は30代中頃の急激な体力の衰えを経験した後であり、自分はもう若くないという意識が一種の恐怖の感情とともに経験されている。子どもの親離れのきざしも見えはじめている時期であり、子ども以外の人生を求める気持ちが激しいエネルギーとなって内に蓄積されている時期である。このエネルギーが発散できずにいるのが、あせり、やりきれない気持ち、むなししい気持ちという形で表現されている。そしてこのエネルギーは、PTA、パートといった比較的小さな仕事でも外の空気が吸えないというだけで気のはれる面をもっている。このことは反面、女性がいかに家の中に閉じこめられているかをあらわすものである。

男性の30代前半の特徴は、嫌悪期という語が散見されることである。職業と家庭生活の同じようなくり返しの生活にあき、マージャン、酒、パチンコなどにうさを晴らしている。それが35歳以降になると本業にたちもどり、独立を考えたり、仕事の内容を再検討したりする。

40歳。女性において記述された内容は、今までの苦しみ数年からすればうそのような落ちつきを感じさせる。大台にのってしまったという一種の安定感があるのである。この安定感を土台にしてこれからの人生を考えている。40歳前半は、子どもの独立が近くなり今までの生きがいであった子どもが手から離れることによって生きるはりを失ったという者が多い。この子離れを契機として、今までむしろないがしろにしていた父親の存在が浮びあがり、「自分には主人しかいない」ということに気づく者がいる。40代後半になるとはじめて余生、人生の後半、最後の人生という言葉がでてくる。これが47～9歳になると老後という言葉になる。40歳前半までは自分の人生を求めていたのが、このころになるとそれほどの積極性がなくなり、「のんびりすごしたい」、「思い出になることをやりたい」という表現に変わっている。自分の人生を求める気力の無くなっていることは、「子どもだけが生きがいになる」といういい方にもあらわれている。

男性においては、40歳は、自分自身の社会的地位や目標を見直し、人生後半に備えようとする年齢である。40代前半ぐらいから停年後の生活設計をたてはじめる。経済設計、再勉強、独立、農業様式の転換など停年後を目標としたものである。45歳以降も停年の問題が主なものになるが、後継者への考慮もでてくる。50歳を直前にすると、不安を強く訴える者がでてくる。男性においても自分の人生の先が見えてきたことにより、子どもを生き

表8 精神的転換期

年 齢	女	性	年 齢	男	性
24—25	<ul style="list-style-type: none"> 結婚か、信仰を通して社会に寄与することによって生きるかの選択をせまられた 今までの生活に自信がなくなり精神的に不安定な時期だったので人生について考えた 		24—25	<ul style="list-style-type: none"> こんなことをしてはいけない何か仕事したい 人生について自信がなかった。常に自問自答しており不安定な時期 	
28—29	<ul style="list-style-type: none"> 育児に重点をおいて数年ふと気がつく20代後半これでよいのかと反省30代までに何か見つけなければと思いながら主婦から1歩もでられなかった 周囲の女性が自分より若く見えてしょうがない 外はみずに良き主婦にならなければいけないといきかせた 子どもも大きくなりやっとな自分のことを考えるようになりこれからのことも考えるとやや不安になり20代から30代にかけての複雑な気持ちがあらわれだしてこのままでよいのかという不安な気持ちになる 		27	<ul style="list-style-type: none"> いつまでも定職につかないでよいものか 	
			28—29	<ul style="list-style-type: none"> 妻子を幸わせにするために現在の仕事では伸びない人の上にたつことを考え管理職試験を受けた 自営業開始 	
30	<ul style="list-style-type: none"> 人生の先が見えてくるようになった 家庭の主婦として解放されたいと思ったが時代が許さなかった 		30	<ul style="list-style-type: none"> 働け働けの毎日努力努力のむなしさ 人生の安定はいつくるのか苦しみ もっと他に自分に向いている仕事があるのではないかと、もっと他の仕事がしたい 	
31—34	<ul style="list-style-type: none"> 厄年を意識し毎年お参りに行った もっと変化のある有意義な生き方をしたいと考えたが現実には厳しく実行することができない もうここまでくるとだめだ。すっかり家庭に落ちついて外へでていく気になれない夫や子どもにかこまれた幸福な生活ただこれだけに満足しているしかしわびしいぜいたくなのだろうか 1つの曲り角、子ども達がだいたい大きくなり自分の立場を再自覚、とともに年をはじめ感じる なるべく鏡をみないようにする 子どもが成長・社会にでた生活にあこがれて自分自身を楽しみたくなった 外にでたいとしきりに思った 		31—34	<ul style="list-style-type: none"> 結婚して嫌悪期を迎える時期 転業して自営業を始める 嫌悪期というか、仕事、家庭もすべておっくうになる。毎日が同じことのくり返して人生にも疑問 職業のマンネリ化、酒、マージャンにふける。毎日の生活にあきを感じる 	
35—36	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが手から離れひまなので、パートでいいから力をためたい 多少婦人部の会合にでられるようになった このまま死ぬまで家庭の仕事だけで過ごしてよいものなのか 		35—36	<ul style="list-style-type: none"> 我が人生の今後の生き方を点検し初めの計画通り独立を決定 独立しこれからだと思った もっと落ち着いた仕事をすべきと思った 転職、都合の良い再就職先があるだろうか 独立自営を計画するサラリーマンがいやになる 	
38—39	<ul style="list-style-type: none"> 今ならもう一度社会人として働けると決意をして実行した 40歳まで主婦業だけでふけてゆくのがむなしく、身につくことをしなければと着物着付学校に行くことで安定した 何となく時間がすぎていくようで気がついてみるとあと1、2年で40歳、やりきれない気持ちと子どもも社会人になるまで安心というやすらぎの気持ちと半々である ママさんバレー、PTAで外に出たい気を発散 何かためたいと手あみの講師の資格をとり人生が楽しくなった 自分では意識しなくとも周囲からいわれると何となく転換期をきちんと迎えたいと思っている。充実した40代を送りたいと考えるのも年齢のせい 子どもに勉強をさせて一流大学に入れようと日夜子どもの学習に力を入れ子どもだけが生きがいのように感じていた 		38—39	<ul style="list-style-type: none"> 将来のため特技・資格をもたねばいけない計理士の試験に合格 独立の最後のチャンスと思う サラリーマンをやめて自分で商売を始める 会社をやめ自家営業に転換 	

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 40 | <ul style="list-style-type: none"> ・ただ夢中の生活からフッと我に帰る年を感じてこれから残りの人生を悔なく方向づけようと思った ・一応子どもたちも大きくなり自分の人生を落ちついて考えられるようになった ・子ども4人も皆大きくなり手がかからなくなったので自分の人生へすすんだ ・人生の峠にきたという実感あり ・自分の夢であった手芸と化粧品のお店をだした | 40 | <ul style="list-style-type: none"> ・40にして立つ、自分自身の社会的地位と目標を改めて見直す ・人生後半に対する計画、考え方、方法について考える ・社会的職責再考 ・社会的活動の折り返し点 ・幹部職員になろうとした ・自分の人生がこれでよいのかまだ他にないかあるのではないかと感じる |
| 41—44 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが成長するにつれ乳離れの淋しさを感じる ・子どもも中3母親との交流も少なく孤独を感じる ・子どもから手が離れ気持ちに張りなくなったとき体が衰えていることを痛感するやっぱり主人が大切 ・やっと子ども6人に手がかからなくなりほっとした。そしてなんとなく娘時代にもどった気がした ・趣味として編物をする、主人以外の良い友人をつくり発散した ・やっと親から離れ家を建てた、しかし半年もたつと目的がなくなり日常生活が無気力末の子が小学校に入ったのを機会にPTAの役員となり社会に目をむける ・子どもが独立しつつあるため自分でもパートなりをしてみたいのだが主人の仕事上外にでられず大変 ・子どもが母の仕事をするようになったがむしやりに働いてきたのでこれから自分のやりたいことを | 41—44 | <ul style="list-style-type: none"> ・これから先の人生について考えるようになった ・家族構成も考え将来の経済設計を考えるようになった ・55歳以降のために再勉強をはじめた ・病気により独立の気持が強くなる ・体力の限界を知り人生最後の農業の方式の転換をはかる |
| 45—46 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもも大きくなったから趣味でももつてのんびりと余生をすごしたい ・もう年だとはっきりと自覚同年齢の人たちにはもう孫がいると知りいちどきに年をとった気がした ・最後の人生への対処を考えた ・このままでいいのかとあせりを感じる。反面気にせず生きようと思う ・体力がぐっとおとろえる、今は子どもだけが生きがい ・人生の後半を迎え何か自分自身の思い出となることをやってみたい ・子どもたちも大きくなって一緒に出歩くことも少なくなり何となく淋しさを感じている ・若い人を見たらうらやましくもう一度若がえれたらと何かにつけてあせりを感じる | 45—46 | <ul style="list-style-type: none"> ・後継者の問題を考える。長男が中3、息子に家業をつがせるかそれとも息子が将来望む職業につかせるか迷う ・脱サラ決意 ・勤人には定年があり退職金などで老後の一応の目安がつくが商人にない。老後を考えて貸ビルをつくる |
| 47—49 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが家庭を離れ老後の生活ということを考える ・あと2年で50だ淋しい時々老後を考える ・人生の坂を下る思い、体力的にも衰えを感じる老後という言葉が気になる、しかしまだ弱音をはいてはいけないといいきかせる | 47—49 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが社会にでていく前より親としての責任を感じる、老後のことも考えるようになり不安になることがしばしばある ・定年後の将来を考え眠れぬ日が続く ・会社における地位も先が見えた ・子どもの成長に楽しみを感じる |
| 50—52 | <ul style="list-style-type: none"> ・心身ともにおとろえた ・がんばりがきかないことを思い知らされる ・人に迷惑をかけないように努力することを心にちかう | 50—53 | <ul style="list-style-type: none"> ・養子が決って安心する反面親としての重荷を感じる ・貸ビル建設による借金返済と仕事に追われていた人生、ここで本当に自分のしたいことを実行しようとし、仕事をセーブして趣味等人生の楽しさを味わっていきたいと思う ・人生の先がみえるようになる ・現在の仕事を生かした第二の人生を考えるようになる ・会社の生活と家庭の両立を考えるようになった ・老後の計画を考えはじめる |

	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生涯と子孫のことを考える退職後の職業のことを考える、上京した田中家の先祖になりたいと思う 55—58 ・退職、第二の人生設計の再確認 ・数字に追われる仕事から解放されてやれやれ、しかし年齢差20～30歳の若い人とどうとけこむかで苦勞中。年をとったなあつくづく感じる ・人生長いと思ったが退職の1年前、これで最後かと思うと淋しい気持 ・老年に備え、車とゴルフを楽しむとするため免許をとる ・創業20周年安定成長しありがたい、5人の子どもも一応のくぎりがつき落ち着いた心境
	<p>60</p> <ul style="list-style-type: none"> ・退職して第2の人生へ出発老後の夢をはたしたい ・これからの残り少ない人生をのんびりすごしたい ・自分の自由に過ごしたい、旅行や趣味もしてすごしたい

表9 社会的貢献意識

年齢	男	性
17—19	・大学生になり周囲が一人前にみてくれた・社会人としての自覚をもった	
20	・成人になった・独立心、自覚、責任感を感じる	
21—23	・大学を卒業し社会人となった・一生の仕事を見つけ人生これからだと思ふ人生の生きがいを感じる・使命感、自覚を感じる	
24—26	・夢中に働いた・精一杯若さをぶちまけた・自分の生活をかえりみることもなかった	
30—34	<ul style="list-style-type: none"> ・自立心が生まれる・精神的にも経済的にも余裕ができた ・人生の表裏がわかる年代・油がのってくる・充実感がある ・社会の人がやっと一人前だと認めてくれるようになった ・落ちついてじっくり勉強してスペシャリストを目指す。よく働いた ・経験の積みかさねで仕事、人間関係、処生術、体力が充実、自信と過信が交錯する 	
35—39	<ul style="list-style-type: none"> ・責任ある仕事ができるようになり人生のはりのようなものを感じた ・働きざかり・精神的にも肉体的にも充実した第1線の活動時代現在の地位はこの時代に培った ・知識装備完了、社会的組織の中で中堅として働いてる・家の基盤をつくる時家の増改築 ・社会的責任を感じる・新しい事業に挑戦ついに成功のきっかけをつかむ、1日16～17時間も働き体力の消耗みじんも感じない ・監督者となり人間を指導する難かしさを知り仕事に意欲がわく ・地位が欲しいと思うようになった。子どもの入学で事業を大きくしたくて頑張る 	
40—44	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的責任を意識する。能力の可能性はまだ人生の半分残っている ・第2の人生だ。発言に責任を感じる若いからで通らず行動に責任を強く感じるようになった・業界の役員になり若さを自覚し勇気わく 	
45—49	<ul style="list-style-type: none"> ・管理職を目指す・自分の意志を若い者に伝え若い者を指導したい ・会社幹部として大局を見ながらすすめなければならない ・気疲れするが幅広い人生・自分の顔に責任をもつ人生 ・自分の教育方針を存分に実行したい 	
50—	<ul style="list-style-type: none"> ・重責につかされ職場から解放される時間がなくなる ・商売安定、後継者にバトンをわたすまであと10年頑張らねば 	

がいにしはじめることがうかがえる。

50歳以降については、女性の記述が少ないが、女性では人に迷惑をかけないようにしたいなど老人の意識がみられる。男性においては、50代前半は、仕事以外の面に目を向ける時期である。本当に自分のしたいこと、趣味、家庭、子孫のことに関心が向けられている。50代後

半は一般には停年後である。それまでの人生にくぎりをつけ第二の人生に入る。ほっとした気持と淋しい気持が入り混じっている。

60歳以降は、残り少ない人生をのんびりすごしたいという気持があらわれている。

(2) 社会的貢献意識

社会の中で生きている男性には、自分が社会の中で役に立つ存在でありたいという気持が強い。この意識は一生を通じて存在する。これを社会的貢献意識と名づけた(表9)。

社会的貢献意識は、まず20歳前後に社会人として自分を自覚することから始まる。成人式、入社をきっかけとすることが多い。その後20代は、若さをぶつけて夢中になって働く時代である。まだ人生の先もみえず自分の限界も知らない。

30代に入ると、社会の中で一人前の人間とみなされ、自らも精神的・経済的ゆとりを支えられて一人前になったという自信をもつ。落ちついてこれから本当の仕事ができると考える。そして30代中頃以降は、会社の中堅としてもっとも充実してはりのある生活を送る時期である。

「社会的責任を感じる」「社会的貢献スタート」という記述にみられるようにこの時期に社会的貢献意識が強まるものと思われる。30代後半の頃から地位に対する欲望がでてくるし、地位もつきはじめる。40代の前半は、地位もつき社会的責任も重くなる。若くもあり、年長者でもあるという両面をもつ時期である。40代後半になると会社の幹部になったり教育界などでは教頭、校長などの役職をねらう時期であり、地位に対する最後の欲望も強い時期である。反面気疲れする時期でもある。50代前半、地位を得ている者は停年まで最高地位にいる時期であり、多忙をきわめている。

(3) 結婚をめぐる人生の転換期

結婚をすること、適齢期を意識することは、人生の1つの転換期になると思われる。従って、結婚および適齢期に関する記述をとりだしたのが表10である。

女性についての記述をみると、23、4歳を境にして変化がある。22歳までの記述の中には、あせったという語が見いだされない。「まだ早いと思ったけど」という記述があるように、適齢期意識はあるがそれに遅れまいとする年齢ではない。それが23歳ぐらいになり友人が結婚しはじめるとあせりの感情がでてくる。それが24歳になるとあせりの感情が強まる。「もう家にいられないと思った」、「あせる気持が強まった」、「ぜひ結婚をという意識が強まった」という記述にそれがみえる。25歳になると適齢期を過ぎてしまったというとらえ方をするようになり、その後も同様である。

全体を通して女性が結婚する場合の心理をみると、世間的にいうと適齢期だからそれに遅れないように結婚するという気持が強い。第二に仕事をしている場合、仕事にむなしくなったから結婚するというものがある。第三に、第一と類似しているが友達が結婚するからというものも多い。

男性については、今が適齢期だという記述は26歳ぐらいからみられ28歳ぐらいまでである。それ以降は義務意識

が強まるように思われる。男性が結婚する理由として特徴的なのは、社会的に安定を得るためというのが多いことである。結婚して一人前という意識があるのあろう。

(4) 人の死と人生の転換期(表11)

親しい人の死は人生の転換期となることがある。人の死の記述の中でもっとも大きな意味をもつのは、子どもの死である。「人生観が変わった」とのべられているように大きな価値観の変化が起きるものと思われる。

次に大きな転機となるのは実父母の死である。女性にとって実母の死は大きなショックをもって受けとめられる。男性にとっては母親よりも父親の死のほうが影響が大きい。男性は、家の柱である父親を失うことにより、自分がかわって柱とならねばならないことを意識し、精神的な一本立ちを果そうとする。女性にとっても母親の死と父親の死では受けとめ方が少し異なる。母親の死は感情的な受けとめ方をされるのに対して、父親の死は支柱を失ったと受けとめられ、父親と母親のもつ意味の違いが反映されている。

義父母の死については、女性にとっては、それによってやっと解放されたという思いがみられる。男性のほうが義父母の死を悲しみをもって受けとめているようである。

配偶者の死は女性のみにみられた。配偶者の死によって一人で生活していかなければならない淋しさ、はりのなきがのべられている。

祖父母の死については、女性のみにみられた。商売人の家庭で祖父母が家業を取りしきっていた場合、家業の後継に対する意欲がみられる。その他の死については男性に使用人の死により人生の空しさを感じたというのがあった。

(5) 子の親となることと転換期(表12)

子どもをもつことは人間にとってどのような意味をもつのであろうか。女性が24歳以前に母親となる場合その多くは最初の子ともである。その為「自覚」、「責任」、「良い母親になろうという決心」、「一生懸命勉強しようと思った」などにみられるように新たな決意が感じられる。25歳以上の場合も、25、6歳の頃は同じような決意があるが、30歳を近づくとつれて出産による身体の疲労についての記述がみられるようになる。子どもをもつことの人生における意味は、それが最初の子ともか2番目、3番目の子どもかによって異なると思われる。30すぎの出産でもそれが第1子の場合には、子どもを持つことは大きな喜びとなり大きな意味をもつ。また「男子誕生で人生が変わる」という記述から、女性でも男子をもつことと女子をもつことは意味が異なるようである。

男性にとって子どもをもつことは、親としての自覚や責任を感じさせるものである。これはどの年齢でも変わらない。しかし、30歳以上の記述をみると、男子の誕生

表10 結婚をめぐる転換期

年 齢 女 性	年 齢 男 性
19	
<p>20</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結婚して家族の責任を感じた ・1人の人間として生きていかねばならないと思ったから1年が早くすぎた ・大人になったという自覚をもった ・家庭の見方が変わった ・結婚というものを周囲も意識しだし自分自身も考えた ・短大卒業して社会人となり自分に与えられた仕事に夢中になったのも一時、このまま仕事を続けるか何か自分のすべき事がないかと迷う <p>21</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分では早いと思いながら農村では適齢期という感じなので結婚した ・友人の結婚がはじまるので考えた ・まだ早いと思いながらも親にすすめられ結婚した。娘時代がなかった <p>22</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人だけの大人の生活始まる、無我夢中 ・22, 3歳には結婚したいと思っていた、やっぴいける自信があった ・適齢期だと思った <p>23</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適齢期だと思った ・仲の良い友人が次々と結婚した自分もひとなみに結婚しなければとあせりの気持があった ・22, 3歳が年頃だと思っていたので良縁を望んだ ・自分の結婚相手をとよく空想した <p>24</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適齢期なので一生を決めて結婚した ・親を離れて始めて何もかも自分でやらなければならなくなる、人間というものは誰も皆このようにして離ればなれになるのかと思った ・仕事にもなれ職場にもなれ怠慢な生活が嫌になりもともと家事の仕事が好きなので、この辺で主婦業に専念しようと思い結婚した ・友人の死により結婚を最大の幸福の場にすることに決心した ・友人などが結婚することになりもう家にいられないと思った ・あせる気持でいっぴいになった ・20代のうちにぜひ結婚という気が強くなり周囲からもよくすすめられる <p>25</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲とあせりでただ結婚した ・適齢期だから・適齢期すぎたから ・周囲の自分に対する見分が変わった ・結婚したくなった ・結婚へのあせり、競争中は若い男性が少なかった ・この年までに結婚しなければと思った <p>26</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もう若くない友達も結婚していくので自分も結婚したくなった <p>28</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何となく働いていることが空しくなった・適齢期を過ぎてしまった・真剣に結婚を考えた <p>30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・30前に結婚しなくてはと思う 	<p>24</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適齢期に近いこと、周囲のすすめもあり結婚決意 ・身心ともに調和した生活を考える ・新婚夫婦の仲良いのをみうらやましかった <p>25</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男として油ののりきっている年齢であり結婚をすることによってこれからの人生に安定感が生じると思った ・結婚とは何か、男女の人間関係とは、経済、住居について考えた <p>26</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独身と違い自分一人ではないのでひじょうに慎重になった・適齢期だ ・友人、上司から結婚をすすめられた <p>28</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結婚意識 ・自分の年齢、自分の子どもたちのことを考え適齢期だと思った ・社会的にも結婚して安定したいと思った <p>29</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲が次々と結婚、一人者の気楽さもさることながら妻帯せねばと思う
	<p>30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲の者がうるさいので結婚せねばと思う ・自分も人なみに結婚しなければならぬ年齢になったかと始めて年を感じた <p>21</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある時急に親が老けてみえたそれ以降結婚を意識した <p>32</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るくて健康的な家庭をつくろうと思った <p>33</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独身時代の生活とは違い一家の大黒柱となって家庭を支えなければならないという意識を強く感じた

表11 子の親となることと転換期

年齢	女	性	年齢	男	性
20—24	<ul style="list-style-type: none"> ・親としての自覚をもった・責任感じた ・子育てに不安あり一生懸命勉強しなければと思った ・この子のために良い母親になろうと思った ・生活が変わった・楽になった ・子育てに夢中で自分のことは何も気がつかず ・生活にはりがあった・喜びひとしお 		20—24	<ul style="list-style-type: none"> ・親としての自覚をもつ 	
25—29	<ul style="list-style-type: none"> ・親としての自覚をもった ・母親となった喜び ・生きがいのあるはりのある生活 ・様子がわかり心配しなかった ・子どもが成人するまで生きたいと生を意識する ・子どもが生まれて若くないことに気づいた ・高年出産のため回復が遅く年を感じた ・子どもが生めるか心配、一般の人々が生んでいるのでしゃくだから生んだ 		25—26	<ul style="list-style-type: none"> ・親となった責任を感じる ・人の親になったか ・親のありがたさを感じた・はじめて親の苦勞を知り絶対心配をかけまいと決心する ・双子が生まれることに男か女か非常に不安と期待があった ・今まで以上に働かねば 	
30—	<ul style="list-style-type: none"> ・2人目の出産で疲労が重くかなり主人に協力を求める ・難産でもう子どもを生むまいと決意 ・やっとさずかったので本当に幸福な日々 ・出産でヤクのがれ ・気持ちはりつめ育児と仕事に充実 ・子どもと家事に追われ夜縮の様につかれ実家の両親のことが頭をはなれない ・長男誕生で人生が変る。物の考え方にゆとりができる ・2人生まれてからもう4年出産は不可能ただ老いるだけかと無気力になる 		30—	<ul style="list-style-type: none"> ・親としての責任感、自立への責任を実感 ・男の子で店のあととりの心配もなくすごせる ・職業に対するプロ意識が心のすみにすみつく ・まわりから自分に対する信用がついた ・息子が生まれ負けてはならないと思った・人生の刺激となった ・待望の男子これより最低10年がんばる ・子をもち命の大切さ知った自分より家族のことを心配するようになった ・次男が生まれこの子が成人する頃は60歳それまで頑張れるだろうか 	

についての記述が多くなっている。待望の男児ということもあろう。男性にとって男子出生は、あととりができたという安心感とライバル誕生による人生への刺激となるものと思われる。

考 察

年齢に対する意識に関する結果について考察する。年齢的限界および、中年、老年、寿命の各項目について60%以上の者が含まれる年齢をみていく。離婚の年齢的限界については、女性32歳、男性35歳、人生のやり直しの限界は女性35歳、男性40歳である。中年を何歳からとするかについては女性40歳、男性41歳、老年については男女とも60歳である。納得いく寿命については男女とも75歳となった。年齢的限界については、出来事の内容によって異なると思われるが、離婚と人生のやり直しに関しては、女性は32歳から35歳まで、男性は35歳から40歳までである。この年齢は男女ともに中年と呼ばれる年代との境界の時期である。この時期以降、男女それぞれ生理的限界を急激に感じていく。結果は離婚、人生のやり直しともにこの限界を強く感じる少し前に行なうべきだと考えていることを示した。人間にとって生理的限界を感

じることは精神に大きな影響を及ぼすものと思われる。

老人期に入る、寿命が何年残されているという意識が人間の心理に及ぼす影響についてはあまり明確にならなかった。主な調査対象の年齢が4, 50代であったためと思われる。対象の幅を広げて検討する必要がある。

次に転換期の内容についてみていく。精神的転換期をより大づかみに年代別にみると、20代は、不安定さをもたらながらも若さ故に無我夢中の時期といえる。30代は前半と後半に分かれる。前半は生活に落ちつき、安定感がみられるが反面、がむしゃらさがなくなりマンネリを感じやすい時期である。後半になると再び活動をはじめ自らの人生を積極的に開拓しようとする時期である。40代前半は、人生の越し方、行くすえを静かに考える時期であり、後半はしのびよる老いに対処しはじめる時期である。50代は、人生に消極的に立ち向いはじめる時期で、ある意味で人生は終わったという意識をもつ時期である。第二の人生が始まったともいえる。60代は、人生に対する人間的欲望がうすれ人間が枯れていく時期と考えられる。しかし50代以降については本研究では明確にされない。それは対象の年齢的制約のためもあるが、対象の職業領域によって大きな差があると考えられるからで

表12 人の死についての受けとめ方

対 象	年 齢	女	性	年 齢	男	性
子どもの死	24・	はじめての子をなくし絶望したいろいろつらいことが重なり家出を試みたが結局もどってきてしまった		39・	喪失感にうちのめされて人生はかくもつらいものだろうかと感じる。人生観も変わる	
実母の死	27・	母死亡		49・	母死亡	
	29・	大変ショックをうけた				
	83・	実母の突然の死でびっくりしましたそれからというものはずべて人に頼らず強くならなくてはと心に決める				
	37・	突然の死で人間の生のはかなさを身にしみて思う				
	43・	母が死にお姑さんが寝つく、高校入試の息子をかかえてお姑さんの食事から下の世話まで自分のことをするひまがない				
実父の死	20・	力強い支えが欲しい心の中から		20・	長男として家族の生活から将来まで考え結局家業をつごととする	
	28・	兄弟だけとなり強くなろうと思った		25・	相続問題が起った	
	34・	実家に同居していたが公団が当り本当にうれしかった。自分達の生活が始まると思った。それまで都営も公団も当らなかったで父のおかげだと思った		26・	父死亡	
				28・	父死亡	
				28・	父が死んだらだめになったといわれないうように	
				33・	父の死をみて将来を考えた	
				37・	一家の主とし責任を痛感し、独立開業	
				45・	店の経営をどうすればよいか考えた	
義父母の死	32・	義母が亡くなり、家業の独立ができ人生これからの思い頑張る		30・	妻の父死亡、何ともいえない悲しい気持ちになり仕事に力が入らなくなった	
	38・	6月と9月続けて死去一所懸命身体の続くかぎり頑張った。家政婦をたのみりポピタンを毎日のみつづける				
配偶者の死	67・	長年つれそった夫に死なれあこれからは一人なんだと思うと急に寂しくなり生きていく張り合いがうすれた				
	71・	これから1人で生活していかねばならない寂しさを感じた				
祖父母の死	35・	祖父を失い世間、仕事に対して責任を感じた。家業に精ださねばと思う				
	38・	祖母を失い一段と急しくなり家にとっても家業にとってもなくてはならない人になろうとつとめた				
使用人の死				30・	その時たちあう。死顔をみていて人生の空しさを感じる。同じ年妻の父を失い何ともいえない悲しい気持ちになり仕事に力が入らなくなったことがある	

ある。人の精神的な若さは、年老いるほど個人差が大きくなるといわれる。人間の老いには精神が大きな影響を及ぼし、年老いても精神の若い人とそうでない人では、人間の身体に大差をもたらす。この精神の若さに職業は大きな影響を及ぼすであろう。本研究の対象の多くは、男性の場合は商人、サラリーマン、女性の場合は家庭の主婦である。本論文では、男性においては職業別、女性においては職業の有無によって結果を分けなかったが、これらの差も響いていると思われる。更に自ら個有の世界をもつ学者の場合、あるいは40、50は鼻たれ小僧など

といわれる政治家の世界では、50歳以降にも独自の世界が開かれるのかもしれない。職業による差なども検討する必要がある。

社会的貢献意識については、男性のみの結果を示した。ここでの社会的貢献意識は、社会にでた人間が、社会に役立ちたいという意識をどう変容させていくかをみたもので、社会にでていることを前提と考えている。しかし、女性に社会的貢献意識がないというのではない。30代後半から40代前半まで、女性の内にある社会にでたという気持は相当な強さをもっている。女性にとってこ

の気持を生かすことが非常に難かしいだけである。女性が社会にでた場合、この社会的貢献意識はどう変化するのであろうか。女性は組織の中の一員となりにくく、職業をもっても一点にすぎないといわれることから、社会的貢献意識の女性における変化も興味のある問題である。

最後に人生の転換期を「停滞しあせりの中で鬱々と過ごす時期」と定義して研究をすすめてきたがこの点について考えてみよう。各年代とも、0と5のつく年齢を中心に同一パターンを描くことはのべた。各年代の前半は、比較のおだやかに進行し、後半は次の年代という時間制限を前にしてあせりを感じる不安定な時期であるといえよう。すなわち、「あせりの中で鬱々と過ごす時期」という意味では、各年代の後半が人生の転換期といえると思われる。しかし、その時期が実際に停滞している時期であるかどうかについてはやや問題がある。行動的には停滞している時期は、かえって各年代の前半ではないかと思われる。新しい年代に入った数年間は、安定している。しかし安定は停滞と結びつく面があるのである。逆に後半は、あせりの中で鬱々と過ごす、こうした感情は行動を動機づけ、PTAその他社会的活動を促したり、独立を企図する者が多くなるのである。何かをしなくてはという感情にかりたてられ行動を起すことになる。すなわち、後半は実際には非常に活動的になる時期といえる。当事者にとって、停滞を意識するのは前半と後半のどちらかという行動上停滞を示すのは前半であるが、心理的に停滞を意識するのはやはり後半であると思われる。そこで、人生の転換期とは、「停滞を意識し

あせりの中で鬱々と過ごす時期」といいかえる必要がありそうである。

要 約

人の一生は、前向きに前進する時期と、停滞する時期がある。後者を人生の転換期と名づけ、転換期の時期と心理的特徴をとらえようとした。対象は、20代から70代までの成人、男子93名、女子113名である。調査は、(1)年齢に対する意識に関する調査と、(2)転換期の内容に関する調査から成る。

結果は次の通りである。

①年齢を強く意識した時期は、男女とも年代の替り目の0のつく時期と、ちょうど中間の5のつく時期、およびヤク年である。

②中年は35歳、老年は60歳頃からはじまるとする者が多い。

③転換期の内容は、イ。生理的限界からくる転換期、ロ。生き方について再考する精神的な面での転換期、ハ。社会的貢献意識における転換期、ニ。結婚をめぐる転換期、ホ。人に死に出会うことによる転換期に分かれた。

④女性は40歳直前、男性は50歳直前に大きな転換期がある。

以上が大きな結果である。考察において人生の転換期とは、「停滞しあせりの中で鬱々と過ごす時期」のではなく、「停滞を意識しあせりの中で鬱々と過ごす時期である」ことが論ぜられた。

—1979. 10. 15. 受稿—

SUMMARY

A Psychological Study on Turning-points of Life

Yukiko Ochiai

The University of Tsukuba

The purpose of the present study was to investigate how and when human adults would recognize the turning-points of their lives. Questionnaires given to 93 males and 113 females of the ages between 20s and 70s revealed the following two findings:

1) Both males and females tend to think of their ages when they reach the ages of 20, 25,

and every 5 years, as well as "Yaku" ages (33 for females and 42 for males, etc.).

2) There are six types of turning-points caused by a. their physical limitations, b. mental changes in life style, c. changes in social status, d. changes in marital status, e. changes in family status, and f. deaths of relatives and others.